



発行・古平町史編纂委員会  
編集・古平町史編纂室  
第五十九号 (一日発行)  
平成六年八月一日

北海の古平風土物語 (二五)

古平『豊年踊り』

高橋 源 五口

泥の木・鴨居木・廻り淵部落方面に移住して来てこの地区を開拓し、半農半漁の生活をしてきた南部団体(旧南部藩領からの移住者)の二代目を主とした連中が、国元に行つて『南部豊年踊り』を習い覚えて来て、古平町郷社(琴平神社)のお祭りや浜町の恵比須神社のお祭り、地元の熊野神社祭に奉納し、御輿といっしょに町中を踊り廻っていた。

総勢二十人ほどの一団で、大太鼓や笛、竹のささらなどの楽器を鳴らし、たすき掛けて威勢よく汗をふきふき踊りまくる。わら草履ばきで、鉢巻きのいで立ちもよく、衣装も華やかで、お祭りの呼び物としてなかなか好評であった。  
元気いっぱいの内山三之助さんをはじめ、木村春吉・木村彦

太郎・鶴谷栄作・金沢徳蔵・佐々木五郎の皆さんが中心になり木村勇次郎・平富治君らもそれに加わっていた。

時代の移り変りで、また、戦中・戦後の一時期の休止はあったが、現在では古平町の伝統芸能として保存会をつくり、町内の若い会員を増やしてこれを発展させようとしている。

毎年夏になると開催されている※『古平大漁祭り』(古平商工会・古平漁協・古平農協共催の古平観光まつり)にも呼び物として出演し、名称も『豊年踊り』と改称した。漁業関係者が主である『越後踊り』(越後広台寺盆踊りとも言っていた)、町内の一般の人の『大漁踊り』と共に盛大に、しかも賑やかに続けられている。

× × ×

古平町の開拓当初、明治四、五年ころには、旧南部藩の領内から親戚・縁者・同郷の人たちが相寄つて、松前奥場所の古平の地に鯨を求めて渡つて来た。また後に呼び寄せたりして、団体での移住開拓の形となつて、現在の泥の木・鴨居木・廻り淵・栄町方面の地区を開拓した。熊と闘いながらも、この地区の農業発展に努めたのである。

幸いなことに、春の鯨漁も豊漁が続いていたので、半農半漁で生活ができた。これらの団体では、共同で鯨建網や歩方漁場も経営していた。鯨漁が落ち目

（珍奇な石のこと）  
蝦夷地には珍しい石がある。貝類やえびのほかに木が石に変わったものもあるが、中には半分が石で半分がまだ木のままというのもある。ある海岸に「カムサイシマ」という石があるが、これは黒い色をした石であるが、白い蛇の形をした紋がある。この石に足が触れると即死すると言つて、アイヌの人たちは大いに恐れている。

アイヌの《ことわざ 世間ばなし集》から

になりかけた大正末から昭和の始めころになつて、かんがい溝(農業用水路)が開発され竣工した。これによって、今までの畑作やりんご栽培から有利な水田耕作に切り替えて、生活基盤を強化することができた。現在は、その三代目、四代目の時代になつてゐる。こうした先人の開拓の精神と努力、その魂を受け継ぎ、故郷の面影を残す「南部郷土芸能」のひとつ『豊年踊り』が、古平町の伝統芸能としてりつぱに成長を遂げたことを見るにつけ、先人の熱意と努力に敬意を表します。

（トゲ魚のこと）  
曹谷場所のある小川に長さ二、三寸の小魚がいるが、背中に三本、両側のひれの下に一本ずつ、五本のとげをもつていた胸がつかえた時にこの魚を焼いてせんじ、その湯を飲むと即効があるという。このことは古い本にも書かれてゐるが、文字を読めないアイヌがこのことを知つてゐるといふことは、天のなせることと誠に好ましい。

# 終わりなき青春

雨の降らぬ六、七月だった。

暦の上では大暑だが炎暑ともい  
うべきか。八月もこんな調子な  
のかも知れないが、若いころの  
旭川や千葉での暑さ、北満の乾  
燥したあの暑さを思い出してい  
る。冬はシラミ、夏はノミとい  
う惨めな青春だった。

あれから、もう五十年も過ぎ  
ていることに気がついた。

さて、今日見た、古平高等学

## 故郷を想う 福井孝平

なあ——と思っている。

校生徒会主催の「第35回古高  
祭」の開催案内に、松田勝之校  
長の「巻頭の挨拶」があった。  
大変感動したので転載すると、  
「サムエル・ウルマンという人  
の詩に次のような一文がありま  
す。

『青春とは人生のある期間をい  
うのではなく、心の持ち方をい  
う。逞しい意志、豊かな創造力  
炎える情熱をさす。青春とは積  
極的に取り組もうとする勇氣、  
安易を振り捨てて冒険心を意味

する。ときには、二十歳の青年  
よりも、六十歳の人に青春があ  
る。年を重ねただけで、人は老  
いぬ。理想を失うとき、始め  
て老いる。』

皆さんは、今、青春のまった  
だなかにいるわけですが、今回  
のテーマにあるように、今の一  
時だけではなく、一生を通じて  
。終わりのない青春であり、  
理想を求め続ける「青春」のよ  
うな人生であってほしいと願う  
ものです。』  
と、結んでいる。  
何度読んでも、良いことばだ

文化会館の図書室で奥様とも  
お会いするが、ボランティアで  
子どもたちの読書指導やら受付  
など、毎日のようにご苦労され  
て、大変ありがたいことだと思  
っております。将来、町の予算  
が許されるのであれば、もっと  
充実した図書館を併設して、専  
門の職員も置いていただくよう  
お願いしたいものです。  
明日(二十五日)は、墓掃除  
でもするか。(下段へ)

# 古平場所と岡田家

## 場所請負人のつとめ

岡田家の文書の中にも、フル  
ピラ場所のことを「海陸ともわ  
が家の創開」「オタルナイより  
一層早きよう」と、その場所を  
開いたことの早いことを述べて  
いる。

場所請負人は、始めはアイヌ  
との交易(物々交換)だけを許  
されていたが、時代と共にだん  
だんその内容も変わってきた。  
商売の取り引きだけであったも  
のが、いつの間にか、半官半民  
的なことをしなければならなく  
なり、まるで松前藩の出先機関  
のようなものになった。

藩から命じられるその内容も  
いろいろと変わったが、文化年  
間(今から約一九〇〇一八〇年  
前)からは次のようなものであ  
った。

このごろ、一年が早過ぎると  
思いませんか。

今日も、雨の降らぬこの暑さ  
です。皆さんも夏負け、夏バテ  
しないように、くれぐれもお体  
を大切に——。

一、アイヌに日用品を供給する  
こと。

二、年二回(六月、九月)運上  
金を納めるほかに、運上金の  
二分に当る積金をすること。

三、運上家や倉庫の修理や再築  
四、特殊な産物の献納と、増産  
をすること。

五、官吏や警備兵通行、旅宿を  
便利にすること。

六、難波船の救助のこと。

七、外国船の監視。

八、備米を毎年新しく準備する  
こと。

九、松明(たいまつ)三百本、  
わらじ三百足を毎年新しく準  
備すること。

十、オットセイを捕獲したら上  
納すること。

十一、ラッコ、鷹の羽などは、  
アイヌからの買い入れ値段で  
買い上げに応ずること。

などのことが決められていて  
この義務を果たさないと処罰さ  
れたり、請負をやめさせられた  
りした。ほかに藩主への上納金  
も出さなければならなかった。



# 思い出と八月の鎮魂の譜

北 政道

「せたかむい」が五十九号まで発行され、古平町の歴史と文化の遺産を後世へ伝え残していく使命と、町を愛していくことの大切さを痛感しております。昔話と考えたわけではありませんが、自分で経験した思い出を書いてみることにします。

平成に入り、昨年末からコメの大騒ぎがあったが、五十年程前の昭和十八年のこと。日本中が狂ったように戦争に突入り、私も徴用工として川崎市の日本光学で働かされた。日曜ごとに東京に出てみたが配給の食糧しか無く、工場の昼食はサツマイモだけという状態で、毎日がひもじかった。

そんな時、ある新橋の食堂の前に『ぬきぞうに』有り、という貼り紙が出ていた。食券無しで五十銭、これはありがたいと早速入って注文したところ、やがて出てきたのが中くらの井で、塩汁の中に大根の葉が浮いていた。間違いなく餅ぬきの汁だけで、これには驚いたり感心

したりした。

当時は自由を買って食べられるものは何も無く、有るとすればそれはヤミ(闇)物資であった。『ぬきぞうに』を腹に入れて銀座に出ると、銀座座では笠置シズ子が舞台で歌い、漫談家として人気のあった牧野周一が「米英非難・日本の勝利」を得

意の漫談でやっていた。また、浅草の国際劇場では、東海林太

## 石碑を訪ねる

### 今中素友歌碑・筆塚

もみちてりはえ きてはみる

蝦夷のくに原 にしきをなせり 素友

鯨の豊漁時代を迎えてい た大正二年、画題を求めて

古平を訪れた素友は、禅源 寺に二か月ほど滞在して、

その間に幅六尺(一・八ヤ 丈)・丈十尺(三ヤ寸)の

大作を制作し、『蝦夷錦』 と題して文部省美術展覧会

に出品して入選したが、こ れは帝国ホテルに買い上げ

られた。素友は福岡県の出身であ

ったが、古平を第二の故郷 として懐かしみ、禅源寺岳

を深めるようになった。戦後の昭和二十三年八

月に、再び古平を訪れ個 展を開いたこともあって

その作品は町内でも所蔵

のものがある。

世界には、平和維持のためだ

と言って核も存在している。全

世界が平和への足並みを乱して

はならない。日本では、連立内

閣ができたが安定政権への道は

まだ遠く、これから不公平のな

い税制行政など、国民の方を向

いた政治を願うだけである。

八月十五日の終戦記念日も近

づき、戦没者の霊に改めて哀悼

の意を捧げる次第である。

大正十一年生まれで、七十二

歳を生きてきた。苦勞も多かつ

たが、こうして思い出をつづる

こともまた今の喜びである。

建立・佐々木孝泰

昭和三十六年十月二十六日

している人が多い。

佐々木孝泰さんとは特に

親密になり、記念碑を建て

るに当たって愛用の絵筆数

本を貰い受け、それを埋め

て、筆塚とした。



# 盆唄のながれる墓参り

渡辺ハツエ



昔は今と違って立派なお墓は少なく、たいていの家のお墓は石をそのまま墓石にしている、石塔のお墓はごく少なくて、そのようなお墓はお金持ちの象徴みたいなものでした。でも、たとえ粗末なお墓であっても、先祖を崇める心が変わりはありません。ですからお墓掃除の日になると、朝早くから本陣の浜へ行って小石を拾い集め、それを袋に入れて墓地まで背負って行

雨模様で心配されていたお祭りもお天気に恵まれ、つづがなく執行できたことは私ども町民の喜びでもありません。八月に入り、今度はお盆の行事が始まります。七日盆にはまずお墓の掃除から始まりま

戦時中は全く詩作をすることがなく、もっぱら童話を創作していた一穂が、昭和十七年、靖国の英霊に捧げるとして「鎮魂歌」を発表した。細谷一郎が混声合唱曲に作曲し、東京音楽院から楽譜として刊行された。これを『鎮魂歌碑』として建立し、郷土出身の戦没者の慰霊に捧げようという建立期成会が発足し、全町民に呼びかけて総

つては、掃除したお墓の周りに敷いて満足したものでした。八月の中旬ともなれば日の暮れるのも早くなって、お墓参りをして帰るころはいつも暗くなっています。当時は街灯の設備もほとんど無かったので、港町の通称『男石・女石』という所の、覆いかぶさるような崖の下の道を、遙か沖合のイカ釣り漁船の漁り火を見ながら帰りを急いだものでした。途中、新地町に寄り道しては、氷水を飲んで帰るのが楽しみでした。子どもの親になっ

## 一穂 《鎮魂歌碑》 除幕式

故郷の戦没者の慰霊

【今日日はこんな日】

昭和41年

額六十万円を目標に、一口百円の募金活動を始めた。碑石は福島県産の黒御影石を使うことにし、碑面は一穂の自筆で、裏面の二百五柱の氏名は末政才治が書いた。彫刻は現地ですることになったが、その後一穂の弟である忠雄が戦死しており、その名簿に加えてもらえないものか、という希望があり急遽、現地で加筆してもらうこ

てからもお墓参りの帰りに、子どもたちと飲んだ氷水の味は今でも忘れません。子どもたちにとつても、懐かしい思い出となっていることでしょう。思えば、昔の盆踊りはずいぶんと賑やかなものでした。山口さんの場所であった、通称「①の干場」で、時間のたつにつれて二重三重と踊りの輪が広がりました。子どもも大勢が輪になって、大人たちは夜中までも踊っていたものでした。私は、もっぱら見る阿呆の方でした。当時、威勢よく盆踊りを盛り

立ててくれた盆踊り唄や笛吹き太鼓たたきの方々は、皆さん故人になってしまわれました。あの世で、賑やかに盆踊りを楽しんでいることでしょう。

とになった。

いよいよ『鎮魂歌碑』が、琴平神社忠魂碑前に据えつけられ昭和四十一年八月二十四日、一穂を迎えて除幕式を行った。

### 鎮魂歌

月沈むあたり、砲とどろきてあらむ  
たつ水鳥の雲のゆきかひ  
ゆきてうちてかへなん極の砲車  
ますらをが笑みていでにし雄の  
剣太刀

野につみて花はむらさき  
かへらぬみたまやすけかれとは  
幾夜さを戎衣ぬひし指の疵  
子らが圍爐裏のいくさばなし

一穂 印

